日本海地域史ＷＥＢ　**天平の交流誌**　2021 ⇨ 2011　ダイジェスト

東アジアの交流と文化遺産　《特集号》

金沢星稜大学名誉教授･(前)松蔭大学教授（中国）大連工業大学･黒河学院 客員教授　藤 井 一 二

■第２回 敦煌楽舞国際学術フオーラム 歓迎展演(長安の舞)■ (中国陝西省)西安音楽学院 2019 年９月

ホームページ　：東アジア多文化交流ネットワーク：

Contents

1　トピック
2　研究の目的・背景
3　渤海王城と天平の交流―よみがえる渤海遺産―
4　遺産探訪：中国東北の流域遺産・博物館をめぐる
5　研究交流：画像でたどる黒龍江・牡丹江流域の文化的景観
6　データベース：渤海・日本交渉関係参考文献
7　プロフィール・主要著作
8　多文化交流学 WEB　　日本海地域史 WEB

■　http://www.ne.jp/asahi/asia/tabunka/　■　※近時、トピックス更新

『シルクロードと大伴家持の時代』 藤井一二 編著

〇大伴家持とその時代

(巻頭言)大伴家持の生涯―中公新書『大伴家持』を執筆して

大伴家持と越路の水海―謡曲「藤」の歴史舞台

因幡の大伴家持―生誕一三〇〇年に寄せて

洛陽発見の李君墓誌―吉備真備と大伴家持の時代

渤海王国と古代日本―王城遺産・景観への憧憬

〇年譜・著作目録

略歴　著作目録　科学研究費等　学会報告・招待講演　辞典類　自治体史等

〇私の出会い

心に刻む言葉 ―吉田晶先生からの手紙

「学海」の燈台―直木孝次郎先生からの便り

楠瀬勝先生からの「伝言」―限りなき「他者」への思いやり

〇研究活動の結びに―歩みを共有するための記録

〇主著「あとがき」―『初期荘園史の研究』『東大寺開田図の研究』

〇回想の画像　　2020 年８月 12 日刊 （オンデマンド版）

■連絡先：asiatabunka@yahoo.co.jp 東アジア多文化交流ネットワーク

東アジアの交流と文化遺産

金沢星稜大学名誉教授・松蔭大学特任教授　　藤 井 一 二

大宰府政庁址　　※ 筆者撮影

天平二年の大宰府と大伴旅人・家持

天平二年(七三〇)の大宰府

天平二年正月十三日(太陽暦の二月八日)　大宰帥大伴旅人、自邸で梅花の宴を催す。(大宰府)

六月　大宰帥大伴旅人が瘡脚で病床に伏す。京から大伴稲公・古麻呂が西下する。

帰京時　大伴百代・大伴家持らが駅使を送る。※家持十三歳

七月　大宰帥家の集会で、山上憶良が七夕の歌を詠む。(大宰府)

十月　大伴旅人、大納言となる。(大宰府)

十一月　大伴坂上郎女、旅人の家を出発し海路で京に向かう。

十二月　旅人、故郷の家に帰る。

大伴旅人と家持　大伴旅人は、神亀四年(七二七)または遅くとも同五年春の人事で大宰府へ赴任したとみられる。旅人より前に在任した大宰帥(だざいのそち)として、祖父大伴安麻呂(七〇五～七〇八)をはじめ粟田真人(七〇八～七一二)、多治比池守(七一五～七一八)らがいるが、彼らの在任を実質三年(足かけ四年)とみれば、旅人の大宰帥時代は神亀四年(七二七)から天平二年(七三〇)にかけてと理解してよい。時に家持は十歳頃である。この時期、特筆すべきは、神亀五年(七二八)から天平三年(七三一)にかけて、筑前国守に山上憶良(やまのうへのおくら)が就いていたことである。父旅人と憶良の交流を通じて、家持は憶良の人生観や作歌姿勢を目の当たりにすることとなった。

家持の筑紫生活　家持が父旅人と筑紫で過ごした期間は、大宰府や筑紫国府に勤務する官人らに出会い知遇を得る格好の場を提供した。当時、神亀四年(七二七)から天平二年(七三〇)にかけて、大宰府と管内の国府に勤務していた都びとを掲げると、以下の顔ぶれである。

[大宰府]　帥(大伴旅人)・大弐(大伴道足―多治比真守―紀男人)・少弐(石川足人・石川宮美侯・小野老・粟田人上)・大監(大伴百代)・少監(安倍奥島・土師百村)・大典(史部大原)・少典(山口若麻呂)

[筑前国]　守(山上憶良)・介(佐伯子首)・掾(門部石足)・目(田氏真上)

[筑後国]　守(葛井大成)

[豊後国]　守(大伴三依か)　　(以上、藤井一二『大伴家持』中公新書より抄出)

梅花の宴　天平二年正月十三日に、帥老(そちらう)の宅(いへ)に萃(あつ)まりて、宴会(うたげ)を申(のぶ)。時に、初春の令月にして、気淑(よ)く風和(やはらぐ)。梅は鏡前(きやうぜん)の粉(ふん)を拓(ひら)き(く)、蘭(らん)は珮後(はいご)の香(かう)を薫(くゆ)らす。(以下略)　※珮後＝飾り袋

(伊藤博『新版・万葉集』一、角川文庫本により、一部追補)

春されば　まづ咲くやどの　梅の花　ひとり見つつや　春日暮らさむ

筑前守山上大夫(山上憶良)　(巻五・八一八)

吾が苑に　梅の花散る　ひさかたの　天より雪の　流れ来るかも　主人(大伴旅人)(巻五・八二二)

(右の歌は、澤瀉久孝『萬葉集注釈』中央公論社 より抄出)

太宰府　早春の景色　　2021 年 2 月 14 日午前

紅梅に彩られた坂本八幡宮（「大宰帥」館址として政庁東丘陵の「月山東官衙跡」が注目される）

“大伴旅人・家持・吉備真備らも眺めた”　大宰府政庁背後の山々（四王寺山）

「令和の里」で語る「万葉の世紀」

筑紫女学園大学・公開講座

2021年2月13日(土) 14：00－16：30
会場　筑紫女学園大学

画像で語る シルクロードと渤海王国
―もう一つの遣唐使―

金沢星稜大学名誉教授・松蔭大学特任教授
博士（文学）　藤井　一二
FUJI I KAZUTSUGU

湖州故城城墻砬子山城

中国黒龍江省寧安市渤海鎮
鏡泊湖山城から珍珠門を望む

シルクロードの結ぶ［国と人］と大宰府

2021年2月14日（日）14：00－15：30
於 プラム･カルコア太宰府

画像で語る

シルクロードと大伴家持の時代
―長安・洛陽と大宰府を結ぶ―

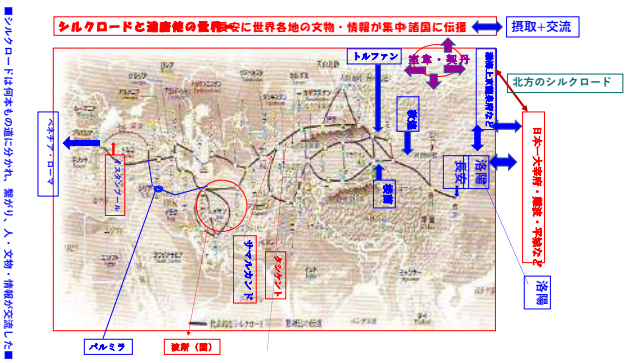
敦煌楽舞国際学術論壇 唐･長安の舞
西安音楽学院･舞踏系《歓送宴》2017年9月

金沢星稜大学名誉教授・松蔭大学特任教授
博士（文学）　藤井　一二

News Letter No27　日本海地域史WEB=大伴家持：前奏曲（三）　2021.春　大宰府特集

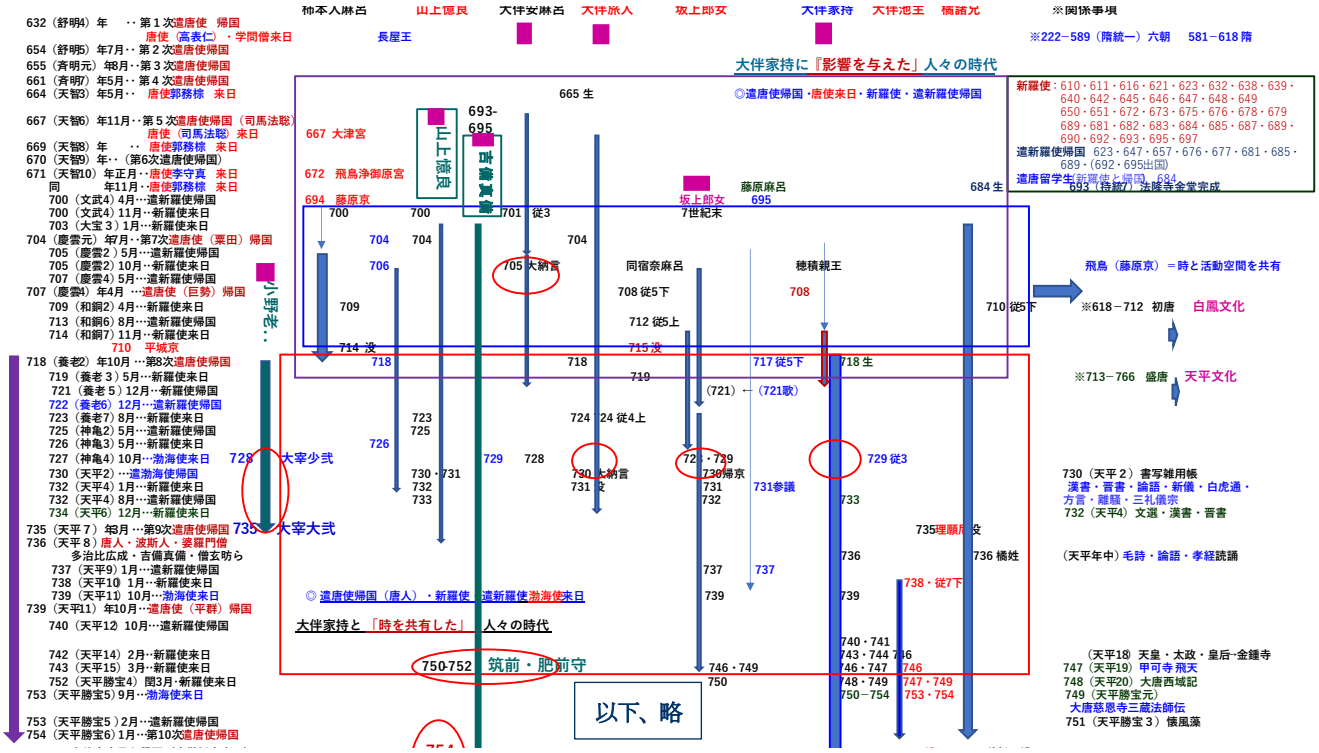
東アジアの交流と文化遺産

金沢星稜大学名誉教授・松蔭大学特任教授　文博　藤 井 一 二



大伴家持を取りまく天平の人びと　－大宰府と万葉びと－（概念図）　藤井試作

○遣日使･遣唐使帰国(唐･新羅･渤海→日本)《 国と国、時代と人、人と人の関係性を読み解く「新たな扉」をひらくため 》



■2021 年 2 月 13 日(土)14:00-15:30　筑紫女学園大学主催･公開講座「画像で語る　シルクロードと渤海王国」　於　同大学ホール

［講座摘要］遣唐留学生として阿倍仲麻呂や吉備真備が海を渡ったのは 717(養老元)年、また唐招提寺の開祖鑑真が来日するのが 754(天平勝宝 6)年のことだが、この世紀、日本は難波・大宰府―長安(唐)を結ぶ南の回廊とともに、中国東北部を中心に栄えた渤海王国(698-926)とも密接に交流し「北方のシルクロード」を形成した。渤海国は唐国へ 100 回余、日本へ 33 回余の使節団を送り、日本からも 13 回の使節が海を渡った。本講座はシルクロードと天平文化に焦点をあて、唐・日本・渤海が結んだ東アジアの「大交流時代」について語る。

■同年　2 月 14 日(日)14:00-15:30　太宰府市(国際交流協会)主催･公開講座「画像で語る　シルクロードと大伴家持の時代」

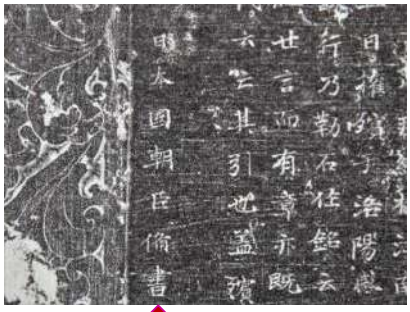
［講座摘要］　丝绸之路与日本古代的文明交流―以唐朝时代为中心―　　於　プラム･カルコア太宰府ホール

７～９世纪有十七次的遣使从日本向唐朝(长安)，9 次的遣使从唐朝向日本。通过在唐都长安的十年以上的逗留，日本留学生･画师等学習了最新的知识･技术。许多的文物传来了从唐朝到日本。奈良的正仓院保管许多的国际的文物。①丝绸之路与遣唐使・唐使―唐代的日本・万葉集歌人、②正仓院收藏八世纪与「东大寺庄园图」中的山岳描写有多類似点，比较「敦煌第 103 窟（南墙西侧･法华经变相图）等的山水景观。③并且，我想言及「敦煌第 321 窟飞天壁画」和「法隆寺金堂壁画飞天」的联锁性。

■太宰府にて：筑紫女学園大学(松下博文教授、社会連携センター藤井薫氏)・太宰府市(国際交流協会千倉氏ほか)にお世話頂きました。

大宰大弐・吉備真備の証跡＝洛陽新発見の墓誌「書」（734年6月）

『日本国朝臣備書』『趙思光撰文』『鴻臚寺丞李訓墓誌』考文物出版社 二〇一九年十二月



■吉備真備⇨大宰府に754年（天平勝宝6年4月）～764（天平宝字8年正月）＝10年間在任

遣唐使の往来②　＜長安への道＝「絲綢之路」に結ぶ道＞

○平城遷都＝710年～794年（平安京）
○遣唐使・・630年～834年（7－8世紀）
○阿倍仲麻呂吉備真備ら入唐・717年
※718年：大伴家持の誕生（－785　没年）68歳
○吉備真備・玄昉らの帰国　・・735年
※唐人・皇甫東朝・来日（・・のち越中国介）
○吉備真備、再度、入唐　・・750年
○4年後の帰国時＝鑑真来日・・754年
※副使大伴古麻呂が夜、鑑真を自船に隠す。

吉備大臣入唐絵詞（ボストン美術館蔵）

唐代・遣唐使船（復元模型）神戸市立博物館蔵

洛陽城　紫微宮　復元模型

画像典拠：中国「百度」

東アジアの交流と文化遺産

〝一帯一路〟楽舞精粋―■初日＝唐楽舞　■離会＝敦煌楽舞　主催＝西安音楽学院舞踏系等

■歓迎:春鶯囀・蘇合香・団乱旋・行楽(満園春)・管子独奏(雨霖鈴)・弾撥楽合奏(婆羅門引)・坐楽(尺調)
■離会:妙音反弾・思惟菩薩・六腕飛天・飛天・千手観音　■会場：西安音楽学院芸術中心歌劇舞劇庁

2018 年度 日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究(C)　課題番号 15K02840
「古代日本と渤海中期王権の交流と流域遺産に関する歴史環境学的研究」

□News Letter　　No.17　2018. 10. 10

東アジアの交流と文化遺産

（上記写真：黒龍江省博物館・ハルビン市紅軍街）

2015 年度より継続中の課題「古代日本と渤海中期王権の交流と流域遺産に関する歴史環境学的研究」に基づき、学術論壇「第３回黒龍江流域:極東学術検討会」（中国黒龍江省黒河市:黒河学院）において資料紹介と成果を「シルクロードと日本古代の文明交流―唐代を中心に―」と題して報告した。本検討会には北京大学・大連大学・チチハル大学・チンギスカン大学（モンゴル）・黒河学院極東研究院の各研究者が東北アジアの大河・黒龍江（アムール）流域における諸民族の興亡と文明の交流などについて発表した。

代表者（藤井）は７月の公開講座「東アジアの交流と文化遺産―古代日本と渤海国―」（中軽井沢図書館）の資料を踏まえ新たに日本の古代資料（記録・金石文）にみる「粛慎」「靺鞨」「渤海」に関する記事を紹介し、７・８世紀の日本が南は遣唐使・唐使、西は新羅・百済・高句麗、東北は渤海使・遣渤海使の往来による多面的・多元的外交を展開したこと、また唐・波斯（ペルシア）・渤海・新羅・高句麗・百済人の渡来を通じてシルクロード諸地域の文物・芸術・情報が伝来した「終着駅」が日本（平城京）であったことを画像と中文で論じた。黒龍江省博物館では、王軍館長の案内によって新たに展示された唐代渤海国の考古資料を実見することができ、とくに渤海国の官印「天門軍之印」（寧安市上京龍泉府址、青銅質、辺長 5.25×5.3 ㎝、厚 1.4 ㎝、柄高 2.9 ㎝、正方形）の撮影を許可されたことは、今回の調査に大きな成果を加えることになった。ここ 10 年余、研究協力を進めている王禹浪教授（黒河学院教授・元大連大学教授、中国中外文化交流史学会会長）に黒龍江流域の大・小興安嶺（こうあんれい）山麓を車で案内され、「岭上人博物館」（黒河市愛琿区新生郷）において当地域に活動した少数民族：鄂倫春（オロチョン）族の生業や生活文化の諸相に接する機会をえた。この民族は山野の動食物や魚類を食材に皮・肉・角・歯や草木・魚類等を加工し、自然崇拝によって集団的結合を図ったとされる。この流域一帯は隋・唐代に勢力を示した室韋（しつい）や黒水靺鞨（まっかつ）などの諸民族とどのような関係をもったのか、想像と考証を要する新たな課題となった。

2018 年 10 月 10 日

城西国際大学客員教授・松蔭大学特任教授
大連大学・黒河学院 客員教授　藤井　一二

2017.11.23 大連民族大学少数民族研究院学術論壇 於大連

丝绸之路与日本古代的民族交流

—以唐朝时代为中心—

城西国際大学客坐教授
松蔭大学特聘教授·文学博士
藤井 一二

丝绸之路与日本古代的民族交流—以唐朝时代为中心—

论文摘要

7～9世纪有十七次的遣使从日本向唐(朝安), 9次的遣使从唐朝向日本。通过在唐都长安的十年以上的逗留，日本留学僧等学习了最新的知识·技术。许多的文物传来了从唐朝到日本。奈良的正仓院保管许多的国际的文物。

我报告

①「发现在西安市何家村的日本金币「和同開珎」银钱」和「第八次遣唐朝使」的关系，

②「正仓院收藏八世纪与「东大寺庄园图」中的山岳描写」有多类似点，比较「敦煌第103窟（南墙西侧·法华经变相图），第66窟（北墙西侧·法华经变相图）等的山水景观」。并且，我想言及「敦煌第323窟飞天壁画」和「法隆寺金堂壁画飞天」的联锁性。

平成２５年度雷鳥会　２１世紀講座　　２０１３年１０月７日

「万葉の世紀を考える」①

高志国から越中国へ

松蔭大学・厚木森の里キャンパス

松蔭大学コミュニケーション文化学部教授
城西国際大学人文科学研究科員教授
博士（文学）　藤井　一二

「万葉の世紀」

○北山茂夫著『万葉の世紀』東大出版会
　万葉の世紀 ―万葉論序説―
　貧窮問答歌の成立
　大化の改新と律令体制
　壬申の乱前後
　大仏開眼 ほか　（1953年初版）
○北山茂夫著『続 万葉の世紀』
　古代政治史と万葉集
　万葉集の形成
　憶良、旅人と家持の世界
　若き日の家持像
　天平文化論 ほか　（1975年初版）
○北山茂夫著『万葉の時代』岩波新書
○川崎庸之『記紀万葉の世界』御茶の水書房
　万葉の女性たち
　万葉人の世界
　大伴家持
　歌わぬ人・家持

○直木孝次郎著「古代を語る」全１４巻
　吉川弘文館 、2008～2010年
（12巻）『万葉集と歌人たち』
　大伴家持の愁い
　柿本人麻呂と大伴家持 ほか
○直木孝次郎著『万葉集と古代史』
　吉川弘文館、2000年
　政争の季節―田辺福麻呂のこと
　大伴家持の悩み ほか

※『万葉集』
巻①‥難波高津宮 ―小墾田宮（推古）
～
巻⑳‥寧楽宮（孝謙・淳仁巻20・4516
（759年）

10月28日(月)雷鳥会 21世紀講座

「万葉の世紀を考える」②

大伴家持の「旅」

―能登・越中をめぐる―

松蔭大学厚木森の里キャンパス

松蔭大学コミュニケーション文化学部教授
博士(文学) 藤井 一二

馬並めて いざ打ちゆかな 渋谿の 清き磯廻に 寄する波見に (三九五四)

2016 年度 日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究(C)　課題番号 15K02840
「古代日本と渤海中期王権の交流と流域遺産に関する歴史環境学的研究」

□News Letter　　No.15　2016. 11. 01

東アジアの交流と文化遺産

大连外国语大学原校长孙玉华、黑龙江省委原副秘书长，省直机关工委书记王晓明、华东师范大学国际冷战史中心主任沈志华、北京师范大学世界史研究中心主任张建华、中国驻哈巴罗夫斯克总领事馆副领事刘宇、黑龙江省社会科学院犹太研究中心主任刘润南、清华大学日本研究中心常务副主任李廷江、大连大学东北史研究中心主任王禹浪，俄罗斯阿穆尔国立大学民族与宗教教研室主任安德烈·扎比雅科，**日本城西国際大学东北亚研究古代交流中心主任藤井一二**等 33 位专家学者受聘为“黑河学院俄罗斯远东智库”咨询委员会首批专家。“黑河学院俄罗斯远东智库”成立大会后召开了中俄日韩四国百名学者参加的“首届黑龙江流域文明暨俄罗斯远东历史文化与社会发展论坛”。

（上記写真：中国黒龍江省《黒河学院》国際論壇閉幕式会場）

本研究は、8・9 世紀に「もう一つの遣唐使」として「北の回廊」で結ばれた日本・渤海国の交流特性と往来路の地域拠点に分布する「流域遺産」の歴史的環境・背景の解明を目的とし、698 年～926 年の約 230 年間、東北アジアに「海東盛国」（新唐書）を築いた渤海国の王城段階ごとに、交流特性と往来路（渤海路・日本道）に位置する両国の流域文化遺産に焦点をあて、関係資料の編年集成と歴史環境学的な考察を目指す。

奈良時代の聖武政権と渤海 3 代王大欽茂(737～793)を中心とする渤海中期王権の外交・内政の検証を軸とし、最新の調査報告が相つぐ図們江・牡丹江流域の王城・王墓遺産と日本海沿岸の主要発着地（湊・津・駅）の歴史的関連・背景の究明を課題とする。渤海中期王城に相当する中京顕徳府・東京龍原府と王族墓誌の発見で注目される貞孝公主（大欽茂第 4 女）墓のある龍頭山古墓群は、吉林省東部の日本海に近い図門江流域に、また詳細な墓誌銘が出土した同省西部の貞慶公主（同第 2 女）墓や第一次上京龍泉府(黒龍江省寧安市)は、鏡泊湖から南北に通じる牡丹江流域に分布する。これらの流域分布の歴史遺産は、往時の「日本道」（渤海⇒日本）・「渤海路」（日本⇒渤海）で結ばれ、王権の中枢が対外交渉を展開し易い地勢に恵まれたことを物語っている。

中国東北部の渤海遺産に関する最新調査の情報公開は、半世紀以上の空白を超えて、近年、図們江流域では中京顕徳府址の『西古城』(吉林省文物考古研究所編、2007 年)、東京龍原府址の『八連城』(同、2014 年)、牡丹江流域では上京龍泉府址の『渤海上京城』(黒龍江省文物考古研究所編、2009 年)、貞慶公主墓の全容を示す『六頂山渤海墓葬』(吉林省文物考古研究所編、2013 年)が相つぎ刊行され、魏存成『渤海考古』、朱威『渤海遺跡』、王禹浪『渤海史新考』『東北流域文明研究』等の成果と併せて資料的環境の整った感が深い。

代表者（藤井）は 2005～2009 年にかけて、文部科学省学術研究高度化推進事業（ORC）課題「北東アジアと北陸地域の経済・文化交流に関する学術情報の集積と学際的研究」代表として、中国延辺大学・牡丹江師範学院・黒龍江省民族研究所・大連大学等と共同研究を進めてきた経緯にたち、中国東北部と古代日本の人的・物的交流の連動性に注目してきた。８世紀の日本海圏を舞台とする日本の聖武天皇と渤海第３代王大欽茂の時代における記録・文化遺産資料を編年的に集成し、日・中共同研究成果として『渤海王城遺産と歴史的環境』（仮題）の発刊を意図している。

（H25－29 研究計画書・抜粋）

2016 年 11 月　1 日

城西国際大学・国際人文学部・客員教授
大連大学・黒河学院　各客員教授　藤井　一二

大伴家持の越中守時代－初めての地方官生活－

おもな出来事

○741年‥能登国を越中国に併合
○743年‥聖武天皇、大仏建立の詔

29歳

○746年‥大伴家持⇒越中国守
○748年‥家持、春出挙（すいこ）のため能登・越中巡行
○749年‥越中に東大寺荘園七ヵ所を設置、家持が東大寺僧平栄をもてなす
○751年‥大伴家持⇒少納言・帰京
（越中在任中‥万葉歌220首余）

34歳

○752年‥東大寺大仏の開眼供養
○757年‥能登、越中国から分離
○770年‥唐人・皇甫東朝→越中国介
○774年‥牟都伎王→越中国介

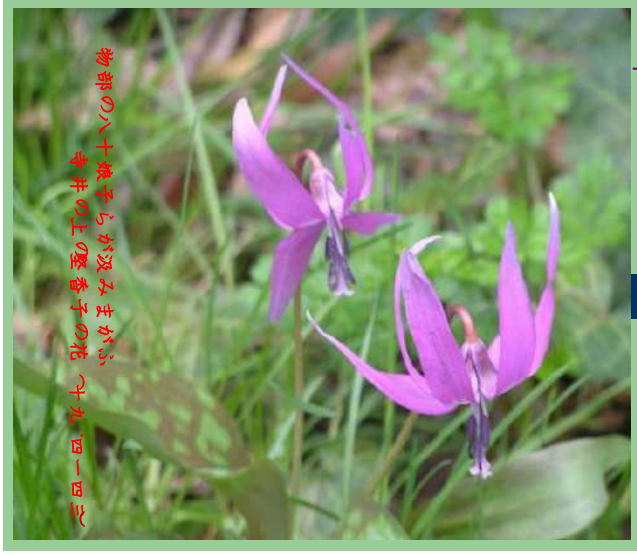
紀伊国屋書店・大和富山店

2018年6月23日　城西大学エクステンション講座

「万葉の世紀を考える」

大伴家持 生誕1300年

―「高志の国」の旅と季節歌―



松蔭大学特任教授・金沢星稜大学名誉教授
博士（文学）　藤井　一二

トピック　②

天平五年（七三三）頃、大伴家持初めての歌”十六の時

「初月（みかづき）歌」

月立ちて　ただ三日月の　眉根掻き　け長く恋ひし　君に会へるかも（六・九九三）
大伴坂上郎女

ふりさけて　三日月見れば　一目見し　人の眉引き　思ほゆるかな（六・九九四）
大伴家持

三日月の眉／鳥毛立女屏風第2扇　正倉院蔵）

2011 年度 日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究(C)　課題番号 2252063
「古代日本の対渤海交渉と渤海王城との交流回廊に関する歴史環境学的研究」

□News Letter　　№8　2012. 01. 20

東アジアの交流と文化遺産

旅順博物館主館　　大連市旅順口区列寧街 42 号　　2011 年 12 月 17 日撮影

2011 年 12 月 15 日～18 日、大連大学（中国東北史研究中心）での公開講座の折に、旅順博物館・大連漢墓博物館を参観し、旅順の市街地を訪ねる機会をえました。滞在中、中国黒龍江省鶴崗市で今夏開催予定の黒龍江流域文明論壇について鶴崗師範高等専科学校（辺校長）・同市社会科学界李主席・同市学術顧問王教授らと協議し、16 日午後、2005 年より交流の続く大連大学中国東北史研究中心（院）で、大藪「日本における観光産業の現状と将来」、藤井「中国発見の日本古代貨幣と歴史的環境」の講義を行いました。17 日、鶴崗市代表団・北野孝一富山国際大学教授・佐藤悦夫同准教授らとともに遼東半島の旅順地区を廻り、旅順博物館・漢慕博物館を参観し、劉述昕同館員の案内で近年、全面開放（軍港周辺・軍事施設以外）された旅順市街地（大連市旅順口区）に入りました。旅順博物館は、日本植民地（関東都督府）時代の 1917 年に「満蒙物産館」として開館し、その後「関東庁博物館」（1919 年）、「旅順博物館」（1934 年）、「旅順東方文化博物館」（1945 年ソ連赤軍旅順駐屯、1951 年中国へ移管）、「旅順歴史文化博物館」（1952 年）、「旅順博物館」（1954 年）へと館名改称、2001 年に分館が落成開館しました。主館の展示は 古代青銅・仏教造像芸術・鼻咽壺芸術・玉器・漆器工芸・陶瓷・貨幣・銅鏡・古印度仏像石刻・日本書画芸術、朝鮮・日本陶瓷芸術・竹木牙雕　工芸、新疆文物の各展庁からなり、膨大な蔵品の内には 20 世紀初頭の大谷光瑞（1876―1948）探検隊（第 1～3 次）の収集した新疆・甘粛などシルクロード文物「6566 件」を含むとされます（1929 年移管、旅順博物館編 『旅順博物館 90 年』2007）。旅順は 1898 年にロシアが旅順・大連を租借、1905 年のポーツマス条約により日本が旅順・大連並びに付近の領土・領水を租借、1932 年に傀儡国家「満州国」領内、1945 年にソ連軍が旅順を占領、1955 年に中華人民共和国に返還された歴史を刻み、現在も市内にロシア・日本各租借・領有時代の多くの建造物が形状を留めています。隋・唐代の旅順は「都里鎮」と呼ばれ、黄金山の北麓に、「開元二年（714）」「靺鞨使鴻臚卿崔忻」銘の鴻臚井石碑遺址が知られます。また、甘井子区に新たに開館した大連漢墓博物館は、日本でも著名な営城子漢墓の資料を中心に、大連地区の墓葬（貝墓・磚墓）・出土文物と歴史資料を展示しており、遼東半島が原始・古代から近現代に至る東アジアの深刻な歴史舞台であったことを、今日に伝えています。

2012年　1月20日

研究代表者　富山国際大学現代社会学部・客員教授（科研費対応）
城西国際大学大学院人文科学研究科・客員教授　　藤井　一二

2011.02.12　　会場　城西大学東京紀尾井町キャンパス

天平の渤海交流

ー海を渡った和同開珎ー

金沢星稜大学・博士(文学)

藤井　一二

「幻の渤海」故地　をゆく

○第１回　平成16年９月２１日（火）～９月２８日（火）

・　①関空→②大連→（空路）→③ハルビン→（専用車）→④牡丹江→（車）→
・　⑤寧安市(渤海鎮・鏡泊湖→（車）→⑥ハルビン→（空路）→⑦大連→関空

○第2回　平成17年9月５日～10日

富山空港→大連空港→長春→瀋陽→大連→富山

○第3回　平成18年８月21日～28日　大連・延吉・牡丹江・ハルビン・長春

- ①8月２１日（月）..富山→大連経由→　延吉(23:50)
- ②8月２２日（火）..吉林省　延吉・琿春・和龍市（専用車で移動）
- ③8月２３日（水）..延吉　→ 敦化　→　鏡泊湖へ(車)
- ④8月２４日（木）..牡丹江　→ハルビンへ(車)
- ※牡丹江市‥旧満州時代の日本人住宅
- ⑤8月２５日（金）‥ハルビン市内
- ※ハルビン市‥旧満州時代の日本人街
- ⑥8月２６日（土）‥ハルビン→長春へ列車移動
- ※旧満州国国務院など
- ⑦8月２７日（日）‥長春　→大連（空路）着
- ⑧8月２８日（月）‥大連　→富山空港着

○第4回　平成19年9月5日～9月9日

富山→大連→ハルビン→　牡丹江→　延吉‥ →大連→富山

2012 年度 日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究(C)　　課題番号 2252063
「古代日本の対渤海交渉と渤海王城との交流回廊に関する歴史環境学的研究」

□News Letter　　No.10　2012. 11. 1

東アジアの交流と文化遺産

中国洛陽市発見の和同開珎銀銭（『中国銭幣』63 期）

安徽省池州市発見の和同開珎銀銭（『安徽銭幣』第 71 期）

江蘇省揚州市発見の和同開珎銀銭（『江蘇銭幣』第 58 期）

黒龍江省寧安市・渤海上京城発見の和同開珎銅銭（『東京城』）

中国で発見相つぐ和同開珎

1991 年夏、中国河南省洛陽市北郊の馬坡村東側に位置する煉瓦工場（洛陽城遺跡北部）で、和同開珎の銀銭が発見されました。霍宏偉・董留根氏「洛陽出土日本和同開珎銀弊」（『中国銭幣』第 63 期）によれば当時、和同開珎の銀銭 5 枚が発見されたが、現在 1 枚（個人蔵）のみが残存し、その法量は、直径 2.4 ㎝、厚さ 1.9 ㎜、重さ 6.35g であると報告されています。洛陽出土の和同銀銭の重さ 6.35g は、1970 年発見の西安出土の 5 枚のうちの 1 枚（直径 2.2 ㎝、厚さ 1.5 ㎜、重さ 6.6g）などに匹敵する銀含有量の多い良質の銀貨です。両氏は洛陽に来着した日本の遣唐使として 3 回（659 年、716 年、732 年）をあげ、このうち天平 4 年（732）に任命した第 9 次遣唐使によって「朝貢品」として唐に持ち込まれたものと推論されています。養老元年 3 月に日本を出発した第 8 次遣唐使は 10 月に唐都長安に到着しており、途中洛陽を経由したことから洛陽・長安のいずれにも和同開珎銀銭を伝えることができたはずです。一方、第 9 次遣唐使は、 天平 5 年（733）4 月に遣唐 4 船、594 人が難波津を出発し、同年 8 月に蘇州に到着、翌年 4 月に貢献したとされます。この時、玄宗皇帝は洛陽へ行幸しており、736（天平８）年 10 月まで同地に滞在しているので、第 9 次遣唐使が「貢献」した場所は洛陽の地にほかならないことになります。このうち銀銭を皇帝への貢献と結びつければ、洛陽が目的地であった第 9 次遣唐使が有力視されるのですが、東西市などでの交関や交易を含めれば、第 8 次遣唐使が伝えた可能性も考慮に入れる必要があります。西安や洛陽出土の和同開珎銀銭は形状・重量・銭文など不揃いの状態にあり、特に貢献用に鋳造したものとは見なし難く、遣唐使の一員が「交易手段」を目的にして携行したことにも留意すべきものがあります。近年、安徽省池州市や江蘇省揚州市などでも和同開珎銀銭の発見が相次ぎ、今後、遣使の「貢献」に留まらず、市場における「交易」の視点からも貨幣伝播の特質を考える必要があります。

2012年　11月　1日

城西国際大学客員教授：　藤井　一二

2011.08.21—22

第四回図們江学術論壇2011

渤海早期和古代日本的交流特性

— 日本史書中的渤海王书 —

日本・城西国際大学客坐教授
金沢星稜大学名誉教授・文博
藤井 一二

吉林省敦化市・六頂山古墓群・敖東城

2010・11 年度 日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究(C)　課題番号 2252063

「古代日本の対渤海交渉と渤海王城との交流回廊に関する歴史環境学的研究」

□News Letter　　No.4　2011. 04. 25

東アジアの交流と文化遺産

渤海王国 上京龍泉府址(第２宮殿横) 「八宝瑠璃井」　　(黒龍江省寧安市渤海鎮　)

平成22年度は、中国東北を中心に栄えた渤海国と日本の交流回廊に関する歴史的環境を考証するため、研究目的に基づき、現地調査と資料収集を進めました。現地調査のうち、海外は中国吉林省延辺自治州地区(延吉市・和龍市)の渤海遺産、国内は渤海客使の来着・経由地となった北陸・山陰・北九州(大宰府・福岡)各地の古代遺跡や博物館等を巡見し、資料の調査・収集を図りました。このうち中国延辺地区では、延吉市の延辺自治州博物館を始めとして、龍井市を経て渤海早期王城＝中京顕徳府址の位置する和龍市西古城周辺にかけて巡見することができ、海蘭河や龍頭山を中心とする地勢・環境の理解に資するところが大きかったと思います。また、渤海国第3代王大欽茂の第4王女貞孝公主の墓がある龍頭山を山麓から望見できたことは、初年度の成果となりました。龍頭山は、宮城址の確認されている中京顕徳府址から地理的に近距離にあって、数多くの王族墓を造築できる長大な山脈であることが確認でき、近くを流れる海蘭(かいらん)河は、布尓哈通(ぷるはとん)河・図們江(ともんこう)を経て日本海に通じており、中京顕徳府の交通・物流環境に重要な役割を担ったことが推察できます。

渤海と古代日本の交流関係を多面的に考察するため、調査・収集作業と共に問題提起を含む研究報告を行いましたが、第一回は 2010 年 9 月、遼寧師範大学フォーラムで「遣唐使と渤海使」を、第二回は同年 11 月、延辺大学主催「図們江学術論壇 2010」において「古代日本の対渤海交渉と渤海早期王城」を報告しました。両報告では、古代北陸の交流・滞在拠点としての機能を果たした能登半島(福良津)と金沢港(「大野」津)の連接機能に注目し、往時の地形を留める福浦港(現在の志賀町福浦港)と「大野郷畝田村」(『日本霊異記』)に含まれる畝田・寺中遺跡の歴史的環境を評価しました。これらの活動内容を、科研費ニューズレター『東アジアの交流と文化遺産』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとして公刊するとともに、中国（大連・延吉）・国内(東京)の学会・講座等において口頭発表し、平成 23 年度に向けて論文執筆への準備を進めています。　　(上掲写真：2006 年 9 月　藤井撮影)

2011 年　4 月 25 日

研究代表者：金沢星稜大学名誉教授・文博　　藤井　一二

2011 年度 日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究(C)　課題番号 2252063
「古代日本の対渤海交渉と渤海王城との交流回廊に関する歴史環境学的研究」

□News Letter　　No.6　2011. 08. 08

東アジアの交流と文化遺産

渤海上京城遺址への玄関口　(黒龍江省寧安市渤海鎮)　2011 年 7 月 15 日　筆者撮影

今夏、7月13日を中心に黒龍江省最北の鶴崗市で第二回黒龍江流域文明鶴崗論壇学術報告会が開催された。鶴崗市はロシアとの境界を流れる黒龍江の畔に位置する緑野と森林景観の印象的な人口約110万人の辺境都市。「黒龍江的山水画廊」と讃えられる《龍江三峡》の景勝地で知られる。12日、同市夢北県の特設会場で合唱・歌舞等の演出が加わり賑やかに開幕し、午後、中国AAA級旅遊景区として風光明媚な名山島の黒龍江流域博物館を参観した。2009年夏に開館の同博物館は、黒龍江流域の自然・歴史・民俗の展示館から成る中国唯一の界江流域博物館で、峡谷・植物・恐竜など古生物・動物・魚類や北方の遊牧・遊撈・漁撈民族、流域に活動した諸民族の特色ある生産・生活習俗が文化財・標本・実物など4000余件の展示があるとの説明をうける。鶴崗市は1200～1300年前、黒龍江流域にまで展開した渤海国の最北域に立地したことから、歴史館で夫余・渤海・金国の解説コーナーに注目した。13日の黒龍江流域文明論壇報告会は、黒龍江省社会科学院の魏国忠研究員、大連大学中国東北史研究中心主任の王禹浪教授(本科研費協力研究員)や清華大学・日本側研究者による報告会は、ハルビン・鶴崗からの報道取材も加わり活況を呈した。私は、科研費研究の一端を「古代日本和中国东北交流」として報告した。７月14日、鶴岡から中・日合同研究班は510キロ離れた牡丹江市へ車で移動し、共同研究を予定する牡丹江師範学院・牡丹江流域文明研究中心や同国際教育学院の教授らと合流した。

7月15～17日、牡丹江市と寧安市鏡泊湖畔の宿舎を拠点に、渤海国上京龍泉府遺址・同遺址博物館・興隆寺、そして鏡泊湖中部の半島へ船で移動し渤海時代の城壁古山城に登った。三面が湖に面する曾ての湖州城は契丹民族等の攻撃を防御する屯兵の要地で、今も 門址・古井・石塁等が残り、山頂から湖を一望できた。寧安市渤海鎮の上京龍泉府遺址は、南門台基の西側から城内に入ると、宮城第一・二殿の東・西廊廡(廊下)址が復原整備され、北の第六宮殿址に向けて歩道と木製階段が整備され宮城内の観覧が可能であった。雨の中、牡丹江師範学院スタッフの案内で、整備の進んだ宮城北門址から真っ直ぐ北に向けて外城壁址まで歩いたのは、３回目にして初めてのこと。辿り着いた箇所は、緩やかな曲線を描く東西路で、西に向かえばまもなく大河、牡丹江へと通じる。同行の魏国忠研究員・王禹浪教授や牡丹江師範学院歴史系教授陣との共同で始まる牡丹江流域文明の考察に向けて、あらたな夢が膨らむ。17日、王・藤井・服部・鍵主の４名は、陸路で牡丹江からハルビンへと移動し、黒龍江省民族研究所の都永浩所長・同省政府発展研究中心崇偉新副主任らと懇話会をもち、今回の旅の成果を祝った。

2011年　8月8日　　研究代表者：城西国際大学連携大学院 各客員教授・文博　藤井　一二

2010 年度 日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究(C)　　課題番号 2252063

「古代日本の対渤海交渉と渤海王城との交流回廊に関する歴史環境学的研究」

□News Letter　　No. 1　2010. 08. 01

東アジアの交流と文化遺産

古代日本の国際外交は、対岸アジア諸国(特に唐・新羅・渤海等)との交流回廊を通じて、「東アジア大交流時代」の一翼を担いました。
本研究は 7～10 世紀、中国東北・朝鮮半島北部・ロシア沿海州を中心に栄えた渤海国と日本の交流について、近年新発見の渤海王城遺産・王族墓(墓誌・壁画)、北陸道の津・駅遺跡資料を駆使し、(1)渤海使・遣渤海使の発着と渤海王城の関連、(2)北陸の拠点港と渤海王城を結ぶ行路、(3)平城京・北陸地域発見の渤海関係資料と渤海遺跡発見の和同開珎などをめぐる交流実態、(4)渤海壁画(貞孝公主墓・三陵 2 号墓)と正倉院絵画の関連比較、(5)対渤海交渉に占める北陸道「加賀郡安置所」(金沢港周縁遺跡群)の構造と役割を歴史的に解明します。
私は、かつて『和同開珎』(中公新書、1991 年)を執筆した際、渤海国上京龍泉府址発見の和同開珎銭をめぐって日本・渤海国交渉の緊密性を論究して以来、海と陸が結ぶ「渤海路」「日本道」が経由した王城＝上京龍泉府(寧安市)・中京顕徳府（和龍市）・東京龍原府（琿春市）と渤海世紀の歴史文化遺産に関心を寄せてきました。
　近年、「古代北陸道地域の交通・社会システムに関する歴史的・考古学的研究」(平成 16・17 年度科研費基盤C)ならびに「北東アジアと北陸地域の経済・文化交流に関する学術資料の集積と学際的研究」(平成 17 年～20 年度文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業[北東アジア交流研究プロジェクト])を通じて、古代北陸道の津・駅・沿海村落が日本海地域の交通ネットワーク形成に重要な役割を果たした内実を北陸在地の視点から描出しましたが、これらの成果を基礎に、当該地域と渤海国の双方向の交流関係や歴史的環境を実態的に解明することを意図し、以下の目標をめざします。

(1)遣渤海使・渤海使の往来と発着拠点となる渤海王城の関係を、王城(東牟山城・中京・上京・東京城など)の段階ごとに整理し、交流実態を把握します。
(2)渤海王城址出土の壁画資料・文物と日本の正倉院宝物等との比較によって、「北の交流回廊」が果たした歴史的役割を明らかにします。
(3) 日本から渤海へ派遣された使節団(遣渤海使)について、「送客使」と「単独使」の場合に区別し、各時期の日本と渤海王権の関わりを東アジア政治情勢の中で描出します。
(4) 近著『天平の渤海交流』をふまえ、日本と渤海を結ぶ回廊が「もう一つの遣唐使」として機能した側面を明らかにし、日本ならびに北陸地域が果たした歴史的環境を解析します。
(5)中国の田広林(遼寧師範大学)、王禹浪（中国大連大学）、魏国忠（黒龍江省社会科学院）、都永浩(黒龍江省民族委員会)諸氏との協同研究を進め、図書『渤海交流の世紀と文化遺産』(仮題)の発刊を目指します。

2010 年 8 月

研究代表者　　藤井　一二

2018 年度 日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究(C)　課題番号 15K02840
「古代日本と渤海中期王権の交流と流域遺産に関する歴史環境学的研究」

□News Letter（特集）　❶報告書Ⅱ・Ⅲの発刊　❷「越の国」に届いた手紙　No.20　2019. 3. 31

東アジアの交流と文化遺産

『渤海王国と古代日本』　　『東アジアの交流と歴史文化』

□**渤海の故地を巡る**：　平成 16 年(2004)年秋、関西空港から大連経由でハルビンへ旅する機会があった。紅軍街にある黒龍江省博物館に展示する渤海時代の文物の観覧を目的としていた。単独行であったが上京城址(寧安市)で発見された王国(698－926)の光り輝く金銅仏・緑釉瓦当・精緻な篆刻による天門軍印・三彩獅頭・銅鏡・銅人など渤海文物を実見し日本の平城宮址出土品との類似性に感嘆した。その後、帰国までの 2 日間を旅行社の専用車で通訳と共に牡丹江を経て、寧安市渤海鎮へと入った。途中の自然景観といえば、田野は広がり緩やかな山並みが印象的で想像していた急峻な山系は眼前に展開しなかった。牡丹江沿いの上京龍泉府址・上京遺址博物館・興隆寺(渤海時代の大石灯塔)を足早に巡回し鏡泊湖畔の賓館に宿を取った。私は夕闇の迫る鏡泊湖面を眺めながら 926 年(日本の延長 4 年)正月に隣国の契丹が攻め入り忽汗城(渤海上京城)が陥落し第 15 代王大諲譔(だいいんせん)は捕虜となり、翌月に国名は「東丹国」、城は「天福城」に改称され 228 年の歴史に幕が下りた「海東盛国」＝「記録の消えた王国」と古代日本の交流の考察に着手するための淡い構想を描いていた。

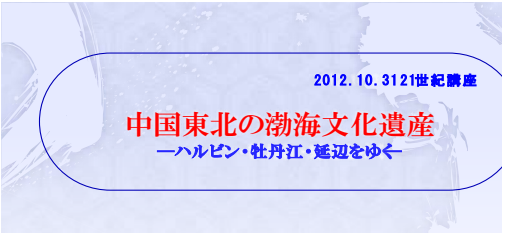
□**多様な東アジア交流学**：　西安市の陝西歴史博物館を初めて訪れたのは日中平和友好条約(1978 年)が締結された翌年夏であった。1970 年に西安市発見の和同開珎銀銭 5 枚のうち1枚を当館で、2 枚目を旅の終りに北京の中国歴史博物館で実見したのが画期となり 10 年後に中公新書『和同開珎』の刊行をみた。今思えば金沢時代に編集担当した『日本海地域史研究』1－14 輯(文献出版、1978－1998 年)と共に東アジア交流学への出発点となった。まもなく開始した金沢星稜大学の文科省採択プロジェクト「北東アジアと北陸地域の経済・文化交流に関する学術情報の集積と学際的研究」(2005－2009 年)への取り組みは内外 30 余名の参画する活動となり、以後の科研費活動と交流研究の展開に大きな支えとなった。

□**活動の記録へ**：　本書は活動成果を記録し記憶と模索の「拠り所」となることを意図しており、城西国際大学で遂行した科研費「古代日本と渤海中期王権の交流と流域遺産に関する歴史環境学的研究」(2015－2019)の成果の一部である。
活動の推進には、学校法人城西大学(法人本部)と城西国際大学(教務課)の全面的協力を受け研究活動の面で王禹浪教授(大連大学、現在、黒河学院)の協力を得た。また多年にわたり日本学術振興会から科学研究費による継続研究を支援されたことも忘れがたい。あらためて関係機関とお世話になった方々に厚く感謝申し上げたい。

（報告書Ⅱ「はじめに」から抜粋）

2019(平成 31)年 季春

城西国際大学国際人文学部 客員教授
大連大学・黒河学院 客員教授 藤井 一二

中国東北の文化遺産を訪ねる

○第１回　平成16（2004）年９月２１日（火）～９月２８日（火）
　①関空→②大連→（空路）→③ハルビン→（専用車）牡丹江→（車→
　⑤寧安市（渤海鎮・鏡泊湖）車）→⑥ハルビン→（空路）→⑦大連空
○第2回　平成17年（2005）９月５日～10日　※富山→大連空港→長春→瀋陽→大連→富山
○第3回　平成18年（2006）８月21日～28日　大連・延吉・牡丹江・ハルビン・長春
　①8月２１日（月）富山→大連経由→延吉　②８月２２日（火）吉林省 延吉・琿春・和龍市（車）
　③８月２３日（水）延吉 →敦化 → 鏡泊湖へ(車)　※敦化山中で富山県人一行と出会う
　④８月２４日（木）牡丹江 →ハルビンへ(車)　※牡丹江市・旧満州時代の日本人住宅
　⑤８月２５日（金）ハルビン市内　※ハルビン市・旧満州時代の日本人街
　⑥８月２６日（土）・ハルビン→長春へ列車移動※旧満州国国務院など
　⑦８月２７日（日）・長春 →大連（空路）着　⑧８月２８日（月）・大連 →富山空港着
○第４回　平成19年（2007）９月５日～９月９日
　富山→大連→ハルビン→ 牡丹江→ 延吉・・→大連→富山　※渤海上京城・西古城
○第５回　平成22年（2010）８月１８日～８月２５日
　富山→大連→延吉 →（略）→ハルビン →大連 →富山　※延辺図書館・黒龍江省博物館
○第６回　平成22 年１０月３０日～１１月５日
　富山→大連→延吉 →大連 →富山　※延辺大学・図們江学術論壇 報告
○第７回　平成23年（2011）７月１０日～７月１７日
　新潟→ハルビン→鶴崗 →牡丹江 →寧安→ハルビン→新潟　※鶴崗論壇・渤海遺跡
○第８回　平成２３年（2011）８月１９日～８月２６日
　富山→大連→（長春）→延吉 →図們 →琿春→延吉 →北京→（大連）→富山　※延辺博物館
○第９回　平成２３年（2011）１２月１５日～１２月２０日
　富山→大連→ 旅順→大連→富山　※旅順博物館・大連漢墓博物館など
○第10回　平成２４年（2012）８月 7日～８月１２日
　新潟→ハルビン→新潟　※黒龍江省博物館・同博物館群力分館
○第11回　平成２４年（2012）９月 ４日～９月８日
　中部セントレア→瀋陽→関西空港　※東北大学・遼寧省博物館　（抄出）